

Gen00318 関連<放射線の危険度> 「誤り人」

#0000 匿名 8808100848

関連<放射線の危険度> 「誤り人」

ヒロシマ・残留放射能の42年より（日本放送出版協会）より

---

#### 原爆線量再評価

1965年、アメリカのオークリッジ国立研究所が、初めて原爆の被曝線量を評価するシステムを提案した。彼らは「イチバン・プロジェクト」という大規模な実験を行ない、その結果を根拠とした。地上500mという高い塔のうえに、小型の裸の原子炉を置いたり、強力なコバルト60の線源を設置して、日本から運んだ木造家屋を実験場に建てて放射実験をした。これに、ネバダの核実験場において長崎型原爆のテストをして得たデータを加え、ヒロシマ・ナガサキにあてはめて放射線量を推定したのである。これを、T65D（1965年暫定線量）というが、最近まで放影研、原医研をはじめ、世界のほとんどの研究調査で使われてきたのが、この評価システムであった。

ところが1970年代に入って、T65Dに色々な矛盾や問題があることが指摘されるようになり、1981年、アメリカと日本に線量再評価検討委員会が設置された。足掛け6年に渡って日米共同の再検討がおこなわれ、1986年3月に、新しい線量評価システムが承認されたのである。これをDS86（1986年線量評価システム）という。放影研では、この計算方式に基づいて直ちに原爆被爆者の被曝量の計算のし直しを開始した。DS86の最終報告は1年程前（1987年）に出たばかりで、現時点では、まだほとんどの研究所や大学、個人研究所が使っているデータはT65Dによるものである。

しかし、この両者の違いのもつ意味は大きい。放射線の人体影響、つまり放射線が人間に対してもつ危険度は、被曝した線量と結果の障害の関係によって決まる。人類が多数の人間の大量被曝を経験したのは、これまでにヒロシマ・ナガサキだけだったので、（今後はこれにチェルノブイリが加わることになるが）、T65Dを使った放影研の被曝データが、放射線防護の基準値を定めるため基本資料として使われてきた。すなわち、簡単に言えば、被曝線量が変わると放射線がもつ危険度が変わることになり、防護基準の見直しにまで及ぶ可能性があるわけである。T65DとDS86は、ナガサキについては大きな違いはなかったが、ヒロシマについては、DS86がT65Dに比べ、空気中の放射線量でガンマ線が2～3.5倍に増え、中性子線が逆に10分の1に減った。もちろんこれまでのT65Dが間違っていたのであり、DS86がより正しい。ヒロシマ原爆の放



人の被爆者を対象に、染色体異常の発生率のデータを再解析したところ、T65Dと比べてDS86の方が発生率が約60%高くなった。また、78人の被爆者を対象に、より精密な調査で8742個の細胞を観察して被曝線量と発生率の関係を2つの計算システムで比較したところ、87の方が約50%高いという結果になった。

これらはいずれも、従来考えられていたより、人体に対する放射線の危険度がさらに高いことを示しており、放射線の防護基準も、厳しい方向に見直しされることになると思われる。12月2日、ICRP（国際放射線防護委員会）のダン・ベニンソン委員長が広島を訪れた。委員長は、個人的見解と断りながらも、原子力発電所など放射線を扱う作業に従事している人たちの職業被曝の基準は、原稿の年間5レムから1レムに厳しくすべきだと発言した。さらに、イタリアで9月に開かれたICRP総会で、放影研のデータが検討された結果、ガンの危険度はICRPの1977年勧告より約2倍高くなると判断、1990年に新勧告を出す予定であることを語った。